

マルタ・マリアの記事 (Lk 10,38-42) をめぐる考察

細田 あや子

1. 問題設定
2. 従来の研究
3. 語句の分析
4. 史的背景
5. 伝承
6. 編集
7. 編集レベルにおける総括

1. 問題設定

ルカ福音書の中におさめられているマルタ・マリアの記事は、イエスの言葉に聴き従っているマリアを積極的に評価する従来の説に対し、主にフェミニスト視点に立った研究者の側から問題点が提起され批判されており、女性を扱った記事として、ルカ福音書の中で、いや四福音書の中で最も議論の絶えない記事となっている。よって、このように注目されている記事をここでも問題にし、この記事をめぐって分かれている肯定的・否定的評価を再検討し、この記述に現れているルカの意図を明確にすることを目的としたい。本稿では、書き手としてのルカと、彼のテキストを受け取る読者との関連を重視するため、方法としては編集史的方法と受容理論の視点を用いて解釈していくつもりである。まず始めに試訳を掲げる。

(Lk10,38)さて、彼らが進んでいくうちに、彼〔イエス〕はある村へ入っていった。するとマルタという名の女が彼を迎え入れた。(39)彼女にはマリアと呼ばれている姉妹がいたのだが、主の足元へ座って彼の言葉を聞いていた。(40)他方、マルタは様々な食卓の準備に心を奪われていた。そこで歩み寄って言った。「主よ、私の妹がもてなしを私だけにさせているのを何ともお思いになりませんか。私を手伝うよう彼女におっしゃって下さい」。(41)すると主は彼女に答えて言った。「マルタ、マルタ、あなたは多くを気遣い思いわずらっている。(42)だが、必要なことはひとつである。マリアは良い本分を選んだのである。それは彼女から取り去られてはならない」⁽¹⁾。

2. 従来の研究

このテキストについて現在出されている意見を瞥見してみたいが、もてなすこと・給仕すること(διακονέω)と[言葉を]聞くこと(ἀκούω)の二項対立がこの記事の軸となるもので、前者が否定され後者が価値あるものとみなされている、とする解釈が、従来からなされている。⁽²⁾A.KnockaertとW.Magassは特に構造分析の観点からこの他にもこの記事に現れている二項対立を挙げている⁽³⁾し、またJ.Brutschekも編集史的方法を始める前にテキスト言語学の視点から語句のレベルでの対照関係を示し、それからモチーフ的な対比も重視している⁽⁵⁾。しかし、伝承の部分と編集のそれとを区別せず、この二つのカテゴリーに分ける解釈だけでは、ルカの編集意図を探ろうとするこの立場としては不完全である。もちろん、ルカが二つのモチーフを対応させる傾向があることも認められる⁽⁶⁾。したがって、この二項対立の分析からさらに深い考察が必要となる。

フェミニスト視点の立場からは、L.SchottroffとE.Fiorenzaが、このマルタ・マリアの記事を取り上げているが、書き手あるいは解釈者の価値観によって作られたこの「もてなす/聞く」の対立関係に異議を唱えている⁽⁷⁾。もてなしは、言葉を聞くことより低く評価されるのに、女性の働きとみなされているのは不公平であるとする。そして、書かれたテキストの背後にある史的状況と、ルカのレトリカルな関心とを明瞭に見極めなくてはならないとし、このテキストは、ルカによって父権制的なものになってしまったとはっきり批判している。マルタが不当な仕打ちを受けることになってしまうのは、主(キュリオス)(Lk 10,39)によってではなく、父権制的に限定を加えようとする書き手ルカのせいなのである。マルタのように抗議したはずの家の教会の女性指導者を沈黙させ、同時にマリアのような口数の少ない従属的な振舞いを奨励するテキストは、ルカの考えに基づくものであり、女性の社会的な役割と教会内での役割の対極化が強められている。このようなルカの意見は、女性の働きを軽視し、その一方で同時に、家事やもてなしは女性固有の役割であると主張するものである。そしてそれは、女性があまりにも多くのことに関わっていることを非難しながら、二重の役割を女性に要求することになっている。「私たちは単に良き弟子であるべきのみならず、良きもてなし役でもなければならぬ」⁽⁸⁾。「紀元一世紀のキリスト教徒の家では、実際にそんな具合だったであろう。女たちは神の言葉のために働き、家事のめんどろをみ、そして仕事をもって働いた」⁽⁹⁾。

わけてもFiorenzaやSchottroffの主唱しているフェミニスト神学は、この中でも様々に分岐している方法のうちでは史的社会的状況の上に立って考察するものであるため、ルカの編集操作による理念化には否定的になっている。女性としての働きや、初期キリスト教会内の状況に焦点を置き、書き手ルカの男性中心の考えからくる女性への要求としてこの

テキストを読むならば⁽¹⁰⁾、このようにルカが男性であることを強く意識させる、Fiorenzaのような解釈も生じてこよう。

また、「もてなす／[言葉を]聞く」という語句に教会制度の職務を読み込むと⁽¹¹⁾、価値の優劣、立場の上下関係が出てくるのは確かである。だがしかし、本当にルカはこの語句を初期キリスト教において術語となった意味で用いているのであろうか。伝承では食卓の給仕・奉仕の意味で用いられているのを、ルカもそのまま採用し、巡回者が訪ねてきた時にマルタがもてなす働きを表現しているのではなかろうか。そもそももてなす (διακονέω) という語がなかったら、この話の伝承は成り立たないのであって、さらに彼の福音書の中で効果たらしめるコンテクストを考える際も、ルカはこの語を伝承にあった意味で用いていると思われる。

原始教団における女性の立場をもう一度徹底的に回復しようとするMoltmann-Wendel, Fiorenza, Schottroffなどの考察と対照的なのがBrutschekのそれである⁽¹²⁾。彼女の研究書は、この記事について初めてまとめたものであるが、編集史的方法に基づきながら、このテキストの中にならかなりルカの意図を読み込んでいる。語句的にみても内容的にみてもほとんどルカ的であるとし、結局ここにはルカの意図に反するモチーフは基本的にないとしている⁽¹³⁾。彼女によれば、この記事の最も主要なテーマは、マリアの言葉を聞くという振舞いが評価され、マルタの思いわずらいが批判されたことだ⁽¹⁴⁾という。彼女の説には伝承の歴史的・社会的背景への視座がだいぶ抜け落ちており、多くをルカの編集とみなしてしまいうきらいがある。だが、言葉(ロゴス)を重視し、信者としての聞く態度を価値づけていることは認められよう⁽¹⁵⁾。

以下では、フェミニストの視点も一つの有効な方法であることを踏まえつつ、まず、テキストの背後にあるものつまり伝承と、現在のテキストに記されているルカの編集句とを区別し比較しながら検討してゆきたい。Fiorenzaのように、ルカの編集による加筆部分を取り除いて伝承の女性の姿を再構築しようとするよりも(ただし、彼女はルカの編集句を明確に指摘しているわけではない)、ルカのコンテクストを考慮に入れつつ浮かび上がるイメージに接近してみたい。

3. 語句の分析

あらかじめ語句の分析の結果を簡潔に述べると、この記事の枠組みであるLk10,38と10,42bは、明らかにルカの編集句であり、福音書の筋の流れの中のひとこまとしてある場面を設定している(ただし、38節のマルタという名前は伝承であろう⁽¹⁶⁾)。10,39.40.41.42aのマリアとマルタの態度を表す語句は主に伝承から受けとられたものと考えられ、所々にルカの編集の手が加わっている。παρακαθεσθείσα πρὸς τοὺς πόδας τοῦ κυρίου(主の足

元に座る, 10,39) の παρακαθεσθείσα (その隣りに座る) や, διακονεῖν (食卓の準備をする, 10,40) などが伝承であるのに対し, 聞くという態度を表す ἤκουεν (10,39)にはルカ
の加筆があるだろう。実際にあるいはメタファーであっても, 主の足元に座って [話/言
葉を] 聞くという態度がなければこの伝承は成り立たないので, 聞く (ἀκούω) を意味する
語は伝承にあった可能性があるが, 「主の足元に座って」という句によってすでに, 学ぶと
いう, イエスの時代においては非日常的な女性の態度を示しかつ二人の姉妹を対照的に表
現しているとみなせるならば, ἤκουεν τὸν λόγον αὐτοῦ (彼の言葉を聞いていた) はルカの
付加と考えられる。いずれにせよ継続性や反復性を示すために, ἤκουενと未完了形にした
のはルカによるだろう (Act16,14でルディアにも使われている⁽¹⁸⁾)。

伝承としてとくに注目すべきは, διακονία, διακονέω (10,40) である。この二つの単語
は, このマルタ・マリアの記事のみならず, 福音書全体を通してのルカの女性観を考える
にあたって重要な契機を含んだ単語である。ここ40節の名詞 διακονία を伝承とみなす理由
は, 福音書での統計による比較からは何も言えないものの (新約で34回中,
Mt0/Mk0/Lk1/Joh0/Act8,その他), 内容的にこの語がなければ話の骨組みが成り立
たないからである。つまり, 女性の働きとしての食事の準備や, さらには巡回者をもてな
す支度ということが, この話の一方の極に存在しなくてはならず, また女性が登場する家
の中という日常的な場面設定が必要なのである。そして, それに対照的なもう一方の振舞
いが対置させられることで衝突が起こり, それをうまく調停する (イエスの) 言葉によ
って不和が静められるという筋書きが根底にあって, 初めてこの話が伝承されると考えられ
るからである。また名詞 διακονία と動詞 διακονέω とを全く同じレベルで取り扱うこと
も差し控えなくてはならないだろう。というのは, この用例のように διακονία には形容
詞 πολὺς がついており, 量的に表せるということが含意されているとみなせるからであ
る。さらにこの περί πολλήν は, この話では最古の伝承にあったと考えられる41節の
περί πολλά を受けた二次的加筆か,あるいはルカの挿入と考えられる。が,ルカが10,42b
を付け加えて物語を効果たらしめたことを鑑みると, 後者の方の可能性が高いと思われる。
つまり, ここの名詞の διακονία は伝承であり, それに περί πολλήν を加えて強調してい
るのはルカによると考えられる。これによって, 10,40の περί πολλήν (διακονίαν) と10,41
の περί πολλά は位相が異なると言える。10,40は具体的に量を表すのに対し, 10,41は抽象
的に理解できるものだからである。

また πολλά と ἐνός との対比も伝承に属するものと考えられるが, これについては伝
記的アポテグマとして記事の内容と関連させてのちに述べる。

4. 史的背景

史実のイエスの段階を想定してこの記事を読むにあたり、まずユダヤ教における女性の位置を、簡単にではあるがみてみたい。

ユダヤ教という宗教は、宗教が日常生活の中に浸透していることをその特色とする。宗教的規範が生活全体を左右しているのである。さらに家そのものが宗教共同体であり、家庭の中で宗教的おきてが厳格に守られていたのであるから、家族成員についての関係（婚姻関係、親子関係など）もみな律法に従うものとされる。とりわけ女性は家構造の中でその存在意義を持っており、どのような立場にあったかを見る場合も、家と密接に関係している。女性の活動の場は家の中にあり、女性の位置や役割は家構造の中に組み込まれている。法的には、女性は男性と異なって、主張しうる権利もわずかであり、公的立場は不安定で、子供や異邦人や奴隷と同様とみなされ積極的な法関与からは締め出されていた。だが、異邦人（寄留人）、孤児、寡婦は、律法によって保護の対象に定められてもいる（申24, 17-22）。

パレスティナでは何世代もの家系がひとつになった形態をとっており、氏族が複数の家族の上位に立つ統合体であり、これがこの民族の基本的な編成単位となる。⁽¹⁹⁾ 氏族とはミシュパーハーと呼ばれるもので、その下位にあってこれの構成要素となっているのが個々の家であり、ベート・アブと呼ばれる。そしてこの家族形態が社会の基本的単位であり、経済の基盤をなし、人々の日常生活の基盤でもあった。ベート・アブとは「父の家」という意味であり、この表現からしてパレスティナの家族構造が父権制であることが明確になっている。そして女性は、婚姻関係——族内結婚（創24章）にせよ族外結婚（創26,34; ルツ1,4）にせよ——あるいは雇用・奉仕関係（下働き・奴隷など）などによって、家構造と結合されることとなり、⁽²⁰⁾ その中で女性は男性に依存しているという立場にあった。

ここでベート・アブの特徴の一つである拡大家族という家族形態に注目したい。これは、ユダヤの家族形態がその子供や孫、さらに、購買奴隷、債務奴隷、日雇い労働者、被保護民（クライアント Klient）、客人など、家父長に隷属する人々をも組み込んでいるというものである。さらに奴隷の家族も同じ家に属していた（出エジ21,1-6）。⁽²¹⁾ 一夫多妻制が普通に行われていたので、複数の妻がいることになる。

以上のような家族形態の構成員として、女性は、差分的男系原理（agentische Differential）⁽²²⁾ によって決定的に位置付けられている。差分的男系原理としては、家父長権の移動、土地財産の相続、レヴィラート婚、g' 1 という規則（「回復」と訳せるような、財産、家族、生命、および自由の維持を目的とした規定を意味する言葉のヘブライ語の語根）⁽²³⁾ などがあてはまる。⁽²⁴⁾ 旧約の女性の記事を用いて、古代イスラエルの女性像の社会的類型化を試みている Karen Engelken も、わずかな例を除いて、旧約の女性は、結婚、夫

婦、誕生、不妊、性、母性といったテーマの枠組みの中で論じられるとしている。⁽²⁵⁾

さて、マルタ・マリアの記事に関連させて具体的にみてみると、ミシュナによれば、女性に対するトーラーや口伝伝承の教授については、排他的に禁止されているわけでもないが、かといって男性と同じように自由に学ぶことはもちろん許されてはおらず、明確に判断することは難しい。⁽²⁶⁾しかし、口伝のあるいは書かれた律法などを学ぶことができた女性は、名を挙げるができるほど少数の例外であり、全体的には、女性は宗教的な事柄に関わることは少なく、公式な場に参加することも積極的には許されておらず、やはり家庭がその働きの中心である。⁽²⁷⁾マルタのように女主人として男たちを家に招き入れるということは、パレスティナでは考えられない。⁽²⁸⁾

5. 伝承

5. 1. 巡回者と支持者（地域教団）との相互関係

次にこの記事の伝承過程での意味と機能を考慮する場合、Gerd Theißenの社会学的考察が示唆的であるので、まずそれにそって伝承のレベルを考えてみたい。

原始キリスト教はイエスによって始められたパレスティナのユダヤ教内の革新運動であるが、Theißenは、それを社会学的に捉えようとする。イエス運動とは、巡回霊能者(Wandercharismatiker)を中心にしたグループが、家々を巡り歩いて宣教や奇跡を行いつつながら地域に広がっていったのであるが、巡回霊能者、地域教団の支持者、啓示者の三つが、それぞれ相互に関連しながらこの運動の役割を担ったとする。マルタ・マリアに即して考えると、この二人の姉妹は、巡回者を受け入れる側という地域教団の役割を果たしている。⁽²⁹⁾自分の家を持たず放浪している説教者が、定住している信奉者の家を訪れ教えを宣べるが、その一方で信奉者たちは彼らを歓待し、衣食住全般の世話を担った。したがってマルタがもてなしをしていたというのも、彼らにとっては不可欠な援助であり、軽くみなされるべきものではなかったことは確かである。もてなすことと教えを聞くことは、もともと分けて考えられるものではないのである。

それ故このような社会的背景から、この記事は、伝承においては、外部からやって来る宣教者に対する信奉者の家の様子、地域教団の内部事情を反映していると考えられる。巡回者に対する態度の在り方も示唆している。ディダケーにも、⁽³⁰⁾このような構造に基づいた相互関係において、巡回者に応じる際の注意や勧告が述べられている(11-13章)。

Theißenの社会学的視点に基づき、そして10,42aの本文批評に関しては彼には従わず évós(ひとつ)の読みを採って、⁽³¹⁾この記事をみるならば、伝承における最も中心となる核は次のように想定されよう。マルタとマリアという姉妹の家に巡回説教者であるイエスが訪れて教えを述べている。マリアはイエスの足元に座ってそれを聞いていたのに対し、マ

ルタの方はもてなしのため食事の準備に追われていた。マルタは妹マリアにも自分のしていることを手伝ってもらおうとして、イエスからマリアにそう言ってほしいと頼んだが、却ってイエスは「多くのことに思いわずらうことはなく、必要なものはひとつ」と言って、マルタの願いには応じなかった。つまりこれは、自分たちの家を訪れる巡回者を信頼してまず何よりもその教えに耳を傾けることを勧めていたと考えられる。しかも巡回者への対応の在り方の提示としてこの伝承が機能を持っていたとすると、マルタとマリアの振舞いを一人の人間のそれとして見ることも可能である。

故にここで確認しておくべき点は、マリアだけがイエスの言葉を聞いているため、マルタは彼女を非難している⁽³²⁾、と考えることは、伝承の段階では不確実であるということである。巡回者を迎え入れる側としてはもてなすことは重要なことであるから、マルタも自ら進んでイエスのために働いており、自分と同様のことをしていないマリアも自分と一緒にそうするよう、イエスに願っているのである。このように巡回者に何かを願うことは巡回者を受け入れる側の一般的な状況であろう。信奉者にとっては、外から来る巡回者は権威あるもので、これらの人々に自分たちの問題の解決を委ねるのである⁽³³⁾。そもそも、巡回者と信奉者あるいは地域教団との信頼関係が両者間の紐帯であった⁽³⁴⁾。

5. 2. 「多：一」——伝記的アポフテグマ——10,42a

「あなたは多くを(περι πολλά)気遣い思いわずらっている。だが、必要なことはひとつ(ένός)である」。この句がこの話のうちで最も古い伝承に属するものと考えられる。

Lk10,42aの「必要なものはひとつ(ένός)である」というイエスの言葉でこの伝承が終っていたと考えれば、「多くのこと(πολλά)とひとつ(ένός)」という語の対比が、別の写本に見られる「わずかなこと(ὀλίγων)」よりずっと際立つ。そしてこの対照が、その後マルタとマリアの振舞い「もてなす／聞く」の二項対立と結合したと言えるのではないだろうか。こうしてこの記事にあっては、宣教者と家に招く際にもてなしの準備であれこれ(πολλά)頭を悩ませているマルタと、宣教に一心に(ένός)耳を傾けているマリアの姿勢の対比が浮き彫りにされ、後者の方が必要なことであることが、イエスの答えによって明確にされたという結末となるのである。

6. 編集

6. 1. 信者としてのモデル——10,42b

「マリアは良い本分を選んだのである。それは彼女から取り去られてはならない」。この10,42bをルカの編集句とみなすならば、イエスの言葉がこれの前の10,42aにさらに重ねられることになり、マリアの言葉を聞く態度が良い部分・分け前(ἀγαθή μερίς)である旨が、ルカによって積極的な価値が与えられつつ受け手に対し明確に提示される。そし

てそれは信者として必要な (χρεία) 振舞いをしているモデルとなる。これは、10,39の「彼の言葉」をルカの編集句とみなし、言葉(ロゴス) = イエスの宣教としたことから明らかである。実際にルカが置かれていた場がある程度組織だった大きなものであり、⁽³⁵⁾巡回者と信奉者の家との個人的な相互関係とは異なる制度が次第に導入されていく過程のところでも、イエスの言葉は信者たちに届くのであり、それを聞く姿勢が信者としての基本とされるのである。そしてモデルとなって例示されていることにより、読者に対してもこの振舞いをするよう求める働きが一層強められている。言葉を聞くという態度は、ルカの視点でみるならば、Fiorenzaが言うように従属的であるとは言えない。これを単に父権制的見地による⁽³⁷⁾圧迫と排除することはできない。この箇所以外でも言葉は重視されており、ルカによって言葉(ロゴス)という語には思想的な意味が込められている。神からの言葉がイエスを通して言われることになるのであり、信者としてはそれを受け取ることが求められる。⁽³⁸⁾しかも最後のこのルカのイエスの句は、女性読者に対してだけ言われているのではないのである。

10,42aの説明となる (γάρ) このルカの編集句は、今まさに無くてはならないこと(χρεία) ひとつの重要性をより強調するとともに、必要だとされたマリアのとった行動が、ある複数の中から選び抜いた (ἐξελέξατο) ものだということを示唆している。するとそこにマリアの主体性をみることができる。すでに確認した通り(注16参照)、中動態の動詞 ἐκλέγομαι は「自分のために選ぶ」という意味であるため、その行為動作と共に主語マリア自身も前面に出ており、マリアの能動的な面が読み取れよう。言葉を書く態度を選んだことによって、彼女は受動的とは言えないことが確かめられる。このように、各個人にとって真のなすべき本分 (μείρις) を選ぶこと、その場・時に最もかなったことを認識することに、ルカのイエスは注意を喚起しており、その選び取る洞察力は、マリアの方が優れていた (δυναθός) ことになる。マリアは彼によって選択権を与えられた、と解することもできよう。

加えて、「それは取り去られてはならない」という言述は、具体的にここでは、「彼女[マリア]に私を手伝うようおっしゃって下さい」(10,40)とイエスに頼んだマルタに関わっており、マリアの姿勢を「取り去ろう」としたことを禁じることになる(未来形 ἀφαιρεθήσεται を命令の意味にとる⁽³⁹⁾)。つまり、この禁止の句によって始めて、マルタの気遣いや思いわずらっていることが、他人の振舞いを取り去ろうとしていることとなり、ここから振り返って、10,40のマルタの要望は抗議となり、もてなしそのものは背景に退く。と同時に、マリアの振舞いを肯定的にみなして存続すべきものであることが示される。こうして10,42bの句は、選択の余地もなく伝統的な役割を強いられていた者を解放することになり、ある全体の中から「自分のために」選び取ることの可能性が保証、確保さ

れるのである。⁽⁴⁰⁾

6. 2. 「多：一」から「全体：部分」へ

伝承のレベルでは、マリアの振舞いが必要なひとつ (ένός) のものとされ、多くのもの (πολλά) と対比されていると指摘した。これに対しルカによる編集では、10,42bの「良い」という単語が絶対級ではないことや、マリアの態度 (イエスの言葉を聞くこと) がある部分 (μερίς) なら、マルタのそれ (もてなすこと) も本来は全体の中の一部であると考えられることから、ルカは後者を全く排除しているわけではないと読める。マルタの態度を否定しているのではなく、思い違いを直し、あれこれ気遣うことよりも必要なすべき本分があることを想起させている。

この伝承の「生活の座」からすると、もてなすことは、家事を担う者としての働きに含まれ、また巡回者の側もその労を多としていたのであるから、これに徹することは然るべきことではある。だが、その伝承の生活の座に機能する場を失う過程 (この記事の場合では、地域教団が成立していく過程) で、もてなしの意味することにも変化が生じてくるし、ここではさらに別の振舞いと比較、対照されることによって、この働きは、別の視点から照射されることとなる。つまり、ルカは振舞いの相違を明確にするために、マルタのもてなしを禁止することとしたのであろう。伝承に存在していた二項対立 (もてなす／聞く) には、接点がなかった。だが、10,42bによって両者は同じ全体の中の部分という関係になり、この関係を前提として、聞くことの方が、多くのことを気遣ったり思いわずらったりしながらもてなすことより良いとされ、後者は批判されるのである。

広くコンテキストを考慮するならば、様々の部分が寄り集まってルカの意図が反映される全体が形成されると言えるだろう。この記事の前後のコンテキストから明らかとなるように (7. 2. 参照)、模範となるべき振舞いは聞くこと以外にも様々求められているのである。伝承の過程についてはイエス運動を社会学的に捉えて、個々の記事の座 (Sitz) を想定することができるが、ルカの編集操作には、彼によるフィクション性が含まれていることを鑑みると、福音書の記事としては読み手への効果をねらったものとなっていることに注意したい。

7. 編集レベルにおける総括

さて、これまでは10,38-42の記事だけを見てきたのだが、以上の考察を受けてルカの編集操作に注目しながら最後にまとめてみたい。

7. 1. モティーフ

7. 1. 1. 言葉の重視

マルタ・マリアの記事では、ルカによって言葉を聞く態度が普遍化されることとなった。

そもそもルカ福音書ではその始めから、言葉に対する受けとめ方が価値判断を伴っていることが読み取れる。編集上の特徴として、言葉（ロゴス）の重視が明確である。

マリアの言葉を聞くという振舞いは、受動的であるとして否定的に捉えられるべきものではなく、より積極的に、現に読者にも同じような態度へと方向づけるよう提示されている。宣教を聞くことの必要性は、時間的・空間的制約を受けずに現在、将来にも通じる。言葉はその伝達の仲介役となり、また言葉の抽象性という性質もその働きに関与する。彼の著した二つの文書を通して、ルカはこの「言葉」を受け手に伝えてその意味するところを説明しようとしているのである。

したがってこのように、これらの言葉（ロゴス）という語はルカによって多様な意味が込められている。例えば、神の言葉（啓示）、イエスの教え、使徒たちの宣教、その内容としての神の国の福音、イエスについての証言、福音書全体という語られた物語などを表し、そしてまた癒しのためにも重要な機能をなしている。⁽⁴¹⁾ 加えて、神の言葉はその存在を具体的に知らしめる場でもあり、「教会のはじめの時」にも救済論的な告知として、なお効力を顕示するものである。(Act 6,7;12,24;19,20)。さらに、教会の成立やその伝道活動において、その成長する様を示すものでもある(Act 2,41.47;4,4;5,14)。聞くことが求められるのは、人々が宣教を受容することによってキリスト教信仰が広まるというルカの理解に基づくのだが、マルタ・マリアの記事に明らかな宣教者イエスの姿は、使徒言行録におけるペテロやパウロの宣教活動の描写にも投影されている。イエスを模範としながら、ルカは意図してペテロやパウロを「教会のはじめの時」における宣教の重要な担い手とさせている。この宣教活動の場面において、言葉の重視も裏付けられる。イエスのなした行為とイエス死後の宣教者たちのそれは、連続しているのである。

7. 1. 2. 「家」・「迎え入れる」

巡回者と定住者との関係が基盤となる宣教活動は、家というトポスを前提として展開される。マルタ・マリアの記事においても、定住者の「家」のモチーフが現れている。イエスを自分の家に迎え入れたのは二人の姉妹であり、そこで旅を進めながら宣教しているイエスと接することとなる。ルカは「家」という場を慎重に選びながら、イエスと彼に出会う人物の関係を描いていると考えられる。

ところで、旅行記においてここで初めてイエスは家に招かれている。旅行記の冒頭には、イエスが使者たちを遣わしたもののサマリアでは受け入れられないとの記事があるが(Lk 9,52-56)、これと対照的である。ガリラヤでの活動とエルサレムへの道行きの際の場合も、イエスはその活動の開始に人々から退けられ、その結果舞台を変えることを余儀なくされているのはルカの手になるが、⁽⁴²⁾ それに対して、マルタとマリアの家が、旅行記で初めて迎え入れる側の役割を演じていることは、注目されてよいだろう。この旅行記の

前に述べられているガリラヤの女たち (Lk8,1-3) は、イエスによって病気を癒してもらった後、イエスと十二弟子に支援していた (διακονέω) とあり、自分たちの家を去ることまでして——非日常的なことである, Lk14,26; 18,29参照——イエスらに同行していたということが読み取れる。それに対し、ここ (マルタ・マリア) では、家の内部つまり日常生活における宗教的実践が示されている。その上女性が巡回者を家に招き入れ対話をしている状況が、旅行記というルカの編集のレベルにおいて効果的に描かれている。巡回者と受け入れる側という構造が、彼の筆によってより身近なものとなっている。

マルコでは、家はイエスによる弟子たちへの秘義的な教えの場所であったが⁽⁴³⁾、ルカ (使徒言行録も含めて) においては、このモチーフは全くなくなったというよりも、客のもてなしや食卓の交わりというコミュニケーションを通してなされる宣教活動の場として、家が状況作りのために意味づけされているといえる。しかもその真の相互関係として、まず何よりもイエス (使徒) の言葉を聞くことが必要であることが提示される。教えは公開されているのである (Lk13,26)⁽⁴⁴⁾。

このようにルカ福音書には、家の中という空間やそこでの食事の様子が描かれている記事が多いが、とりわけマルタ・マリアの記事同様、イエスがある人々の家に「迎え入れられる」場面設定をもった記事が含まれているという事実気づかされる (例えば, Lk7,36 編集句; 10,38 編集句; 14,1 編集句; 19,5; 11,37)。これは、Klein や Brutschek が想定するルカの特長伝承のモチーフのひとつである⁽⁴⁵⁾。が、マルコの記事にルカが手を加えて、イエスが家に招かれるということを強調している箇所もあることから (Lk8,41, 上述の編集句にも留意)、ルカは家の中におけるイエス——しかも招かれている場合が多い——というある図式を考慮していたといえよう。

これは、のちに使徒言行録においてペテロやパウロらが信奉者の家を訪れる記事とも並行関係にある。家の場面で象徴的なのは、そこが信仰共同体の機能を持ち、血縁的家族を越えた空間を表現していることであろう。家の教会というような個人的な場から始まり、その後共同体意識が強まっていく過程で、信奉者らが使徒たちを家に招き入れるということを強調した記事 (例えば Act 10,5; 16,15.34 など) が多いのは、ルカが、伝承として持っていた素材の中に理想の家の教会のイメージを重ねているからと考えられる⁽⁴⁶⁾。

しかも、家と女性は本来切り離せないものであろう。したがって、家を理想化しているならば、そこに登場する女性に対しても何らかの価値や意義を与えているといえるのではないだろうか⁽⁴⁷⁾。この縮図の中でマルタとマリアはルカの意図に沿った振舞いをしているのである。

7. 2. コンテキスト

7. 2. 1. 前後関係

マリアの振舞いが信者のモデルとなっているのだが、これを前後のコンテキストからみるとさらにルカの言わんとしていることが明確になる。とくに、マルタ・マリアの記事の前に律法の大切な戒め「神への愛と隣人への愛」が提示され、それに密接につながっている「よきサマリア人のたとえ」が置かれていること、後ろに「祈り」が主題の記事が並べられていることに留意したい。神への愛、隣人への愛、イエスすなわち神の言葉を聞くこと、祈り——これらはみな神に対する信者としてなすべき理想の態度について述べられていることになる。わけてもルカのイエスによるこれらの要請は、編集句 (Lk 10, 28b. 37b. 42b; 11, 13) によってそれぞれ確実なものとしてされている。それぞれのペリコペーにおいては、イエスの発言は律法学者に、マルタに、あるいは弟子たちに言われたことになっているが、全体としてはそのようなコンテキストを読み進む読者に向けられている。そしてこれらのことは、神との関係を前提とした「行い」の強調がルカによってなされていることに通じており、弟子・信者への教えが並べられているこの箇所は、とりわけ実践的意図に沿った倫理的勧告が色濃いものとなっている。

Sellinは、マルタ・マリアの記事は先行、後続するコンテキストからは孤立しているとするが、これは適切ではないだろう。彼によれば、マルタのもてなしは律法遵守ではないからサマリア人の律法にかなった慈悲深さとは全く関係ないとなるのだが、サマリア人とマリアの振舞いを比較すれば、ルカの企図する行為をしていることによって、二人は同じレベルに立っているのであり、決して無関係とはいえない。さらに、このことによって男女のパラレルな関係というルカ固有の図式を形成していることにもなり、記事の並べ方にはルカの意味づけが働いている。⁽⁴⁸⁾

7. 2. 2. 10章での位置

さて次に24章までであるルカ福音書の中の10章という箇所に注目してみると、弟子派遣で始まるこの10章では、各地を巡りつつ宣教するというテーマが一貫して述べられているが、とくに町と家との相互関係が強調されている。⁽⁵⁰⁾ 弟子たちは家に入ったら、まず「その家に平和があるように言いなさい」と教えられる (10, 5)。ある家が宣教の拠点となってそこから町全体に教えが広がるという連関性は原始キリスト教運動でも実際に効果のあるものであったが、⁽⁵¹⁾ この拠点となる家が次第に「家の教会」となり、その家の家族のみならず地域の住民らへも宣教が伝わるということを、伝承から受け継いでさらにルカが独自に図式化している。

10章の中に置かれた構成を考慮してもやはり、マルタ・マリアの記事もルカの編集によって弟子派遣の記事と同様のモチーフでつながっていることが明らかとなる。同時代の受け手に対する使信という性格が濃いことが読み取れるのである。

Lk 10, 1-16の72人の弟子派遣の記事をみても、この枠となる10, 1と10, 16は、ルカ

の編集句である。⁽⁵²⁾ Miyoshiによれば、弟子派遣の中心となる主題は、Lk10,9.11で述べられている、神の国が近く到来することの告知である。⁽⁵³⁾ 神の国の到来とは、主が到来して支配することであり、まさに弟子派遣は、主が来る前にそのことを告知して人々にあらかじめ備えをさせることがその目的である。⁽⁵⁴⁾ 神の国の到来を準備することとは、弟子の宣教を聞いて従うこと (ἀκούω) によってなされ、それがそのまま来たるべき主に聞き従うこととなる (10,16)。Lk10,16がルカの編集句であるということにより、聞くこと (ἀκούω) の強調も理解されるが、Miyoshiは、8,1-21とのつながりから考察しており、⁽⁵⁵⁾ 示唆的である。これは言葉の重視にもつながるものであり、まさにこの関連から、マルタ・マリアの記事も同様の線上にあると言える。

7. 2. 3. 旅行記における位置

さらに大きく視野を広げて旅行記の中における位置をみてみよう。ルカ福音書に独自なのは、イエスのエルサレムまでの行程を明白にし、それまでのガリラヤでの活動と全く異なるものとしていることである。イエスはエルサレムで十字架につけられるため、その地を目指して進むことになる (Lk9,51)。この歩みの中で教えが繰り広げられてゆくのであるが、たとも多く使用されながら、勧告、訓戒、批判などが弟子、群衆、ユダヤ教の論敵らに向かって語られている。

Brutschekは、マルタ・マリア物語とザアカイの記事が、旅行記の初めと終わりの部分にあることに注目し、これらは並行するとしている。⁽⁵⁶⁾ それによると、どちらもイエスを招き入れること、家のモチーフがあることがまず共通し、マリアが選んだよき本分が、ザアカイの救い (Lk19,9) に相当することになっている。こうして彼女は、旅行記においてはイエスは救済をもたらすものとして人々に訪れるということを強調している。イエスが家に立ち寄ることを救いとするのは、早計と思われるが、ザアカイの記事と関連させることは、旅行記の性格をうまく引き出しており示唆的ではある。それ故ここではこの説を受けて、イエスに対応する者の振舞いが、信者のモデルとなっていることを強調したい。「救いがこの家に来た」とイエスが言う前に、ザアカイは「自分の財産の半分を貧しい人々に与える」(19,8) と言っていることを積極的に評価するならば、彼の行いが救いの前提となっていると考えられる、つまり、伝承の段階では、イエスからの訪問の方に関心が持たれていたと推測できるのだが、ルカの編集によって、イエスと向かい合う人物の行いが、ルカの意図を反映したものとなっていると言えるのである。

このような旅行記という枠組みの中に組み込まれたマルタ・マリアの記事が、初めてイエスを迎え入れるとの場面設定をもっていることに注目すると、やはり巡回者とそれに対応する者という関係が浮き彫りにされる。その上「信者として必要なことはイエスの言葉を聞くことである」と提示されたことは、ルカのイエスの教えの基本となっているし、使

徒言行録をも視野に含めると、とりわけ定住している者つまり教団での信者としての在り方を示唆しているのである。

注

(1) 本文批評の問題として、10,42aには、六通りの読みがある。本稿ではNestle 26版(d)に従う。

(a) ὀλίγων δέ χρεία ἐστὶν ἢ ἐνός :アレクサンドリア型 (B)

(b) ὀλίγων δέ ἐστὶν χρεία ἢ ἐνός :アレクサンドリア型 (L, 33), 西方型 (syr), 前カイサリア型

(c) ὀλίγων δέ ἐστὶν ἢ ἐνός :アレクサンドリア型 (シナイ写本)

(d) ἐνός δέ ἐστὶν χρεία:アレクサンドリア型 (p45,75), ビザンティン型 (A, K, P, D, P, F), 前カイサリア型

(e) ὀλίγων δέ ἐστὶν χρεία: 38, syr. pal, cop

(f) すべて削除: ,syr.s

この六種類の読みも、中心となる語に留意するならば、その違いを明確に示すものとして、(a)(b)(c)/(d)/(e)の如くに分けることができる。外証的には、(a)(b)(c)(d)それぞれが重要なアレクサンドリア型の証拠を持っている。内証的にみるならば、この句の直前のπολλάとἐνόςとの対照が分かつたことなく伝承されてきたと考えられる。そして、πολλάとἐνόςの意味は、具体的には示されていない。これに対し、多数の異読は、ἐνόςをどう理解するのかということによって生じていると言える。つまり、ἐνόςを具体的に食事の準備とみなして、これをὀλίγωνに置き換えるか、さらにはἐνόςにὀλίγωνを加えて意味を軟化させていることになる。よって、ὀλίγωνとなっている(e)は二次的であり、さらに(a),(b),(c)は後代の折衷操作によると考えられる。したがって、より難解な読み、より短い読みが優先するという原則に基づいて、ἐνόςの読み方が古いと判断できよう。ここで外証的に良質であるアレクサンドリア型系列のパピルス45(3世紀)に裏付けされる。これらの考察から、ここでは(d)の写本の読みを採用する。

(2) Grundmann, Das Evangelium nach Lukas. 1984, 226; Klostermann, Das Lukasevangelium. 1975, 122; Marshall, The Gospel of Luke. 1978, 451; Schmithals, Das Evangelium nach Lukas. 1977, 129など

(3) Knockaert, A., Structural Analysis of the Biblical Text, Lumen Vitae 33,1978,471-481; Magass, W., Maria und Martha—Kirche und Haus. Thesen zu einer institutionellen Konkurrenz (Lk10,38-42), LingBibl 27/28,1973,2-5

(4) Brutscheck, J., Die Maria—Marta Erzählung. Eine redaktionskritische Untersuchung zu

Lk10,38—42, 1986,38—40,45—48

- (5) Ebd.96—132
- (6) Flender,H.,Heil und Geschichte in der Theologie des Lukas, 1968; Witherington,B.,Women in the earliest Churches,1984
- (7) Schottroff, L.,Frauen der Nachfolge Jesu in neutestamentlicher Zeit,1980「新約聖書の時代にイエスに信じた女性たち」『聖書に見る女性差別と解放』新教出版社, 1986, pp.51-100所収。Fiorenza,E.S., A feminist Critical Interpretation for Liberation: Martha and Mary Lk10,38—42, Religion and Intellectual Life,3,1986,21—36
- (8) Fiorenza,a.a.O.,32—33
- (9) Schottroff,a.a.O.,邦訳p.99
- (10) Fiorenza,a.a.O.33
- (11) Fiorenza,Ebd.,30; In Memory of Her—A feminist theological Reconstruction of Christian Origins,1983,165『彼女を記念して——フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』日本キリスト教団出版局, 1990,p.247;荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店, 1988,p.156ff.
- (12) Brutscheck,a.a.O.
- (13) Ebd.132
- (14) Ebd.110—132
- (15) Ebd.53.58f.118—127.139
- (16) 主なルカの語句を挙げると以下の通り。〈10,38〉ἐν τῷ+不定詞; Jeremias, Die Sprache des Lukasevangeliums,1980,28; Fitzmyer,119f, πορεύομαι; 新約で154回用いられているうち, Mt29/Mk0/Lk51/Joh13/Act37, εἰσερχομαι; 194回のうち, Mt36/Mk30/Lk50/Joh13/Act34, その他 εἰς κώμην τινά; 名詞+τιςはルカの Jeremias,Ebd.,193; Fitzmyer,111, γυνή δέ τις ὀνόματι; Jeremias,Ebd.,193; Fitzmyer,111, この用例は新約ではルカ文書に限られる (Lk1,5;10,38;16,20; Act8,9;9,33;10,1;16,1)。ὕποδέχομαι; δέχομαι ならば伝承句と考えられる。Jeremias,Ebd.,180,193, 〈10,39〉τῆδε, ἀδελφὴ καλουμένη, τὸν λόγον αὐτοῦ, 〈10,40〉ἐπιστάσα, 〈10,42〉 γάρ は前述の句の説明づけに用いられている。ἀγαθός のルカ福音書16回の用例をみると, マルコ素材6回のうち, Lk8,8はMk4,8の καλός を ἀγαθός に変えており, Lk8,15; 23,50には ἀγαθός を付け加えている。したがってルカはこの語に肯定的な意味を持たせるよう意図していると考えられるかもしれない (Brutscheck,a.a.O.,92)。Act9,36; 11,24; 23,1はいずれも肯定的に用いられており, ルカの意図にかなった意味を持たせている。とくにAct9,36は, 女性信者(μαθήτρια:新約でここのみ) タビタについてであるが, 良き行いと施しとをしたとして, ルカによって積極的に評価されていることに注目したい。μερίς この語はLXXでは食料の分け前, あるいは土地の割り当てなどの意味で用いられ, そこからもっと一般的, 抽象的な意味として, 関与すべきことなども表す (Ps 15,5 f)。ἐξελέξατο ルカ福音書4例のうち, Lk10,42; 14,7が特殊伝承で, Lk 6,13; 9,35は, Mk 3,

- 14; 9,7をルカが変えている。この中動態は、「自分のために選ぶ」という意味であり (Bl-D-R,316; Bauer,487f), 主語がその行為動作に深く関わることを示している。ἤτιςはルカの用法 (Bl-D-R,293; Bauer,1188; Jeremias,a.a.O.43)。
- (17) マルタという名前は、女主人、女支配者という意味を持つが (St-B,2,186; Leipoldt, Die Frau in der antiken Welt und im Urchristentum,1955,69), この物語に適した役の象徴的な名前として使用されているとは明言できない。
- (18) Brutscheck,a.a.O.,80
- (19) RAC Art.Haus,Bd.13, 843-854
- (20) Engelken,K.,Frauen im Alten Israel. Einebegriffsgeschichte und sozialrechtliche zur Stellung der Frau im Alten Testamant,1990,76
- (21) RAC Art. Haus,Bd.13,843ff.
- (22) Kippenberg,H.G.,Religion und Klassenbildung im antiken Judäa,1978,28『古代ユダヤ社会史』教文館, 1986,43
- (23) ThWAT,Bd.1,884-890
- (24) Kippenberg,a.a.O.,28,邦訳43
- (25) Engelken,a.a.O.,177
- (26) M.Sotah 3,4; 7,4; M.Nedarim 4,3; M.Kid 4,13; ThWNT,Bd.1,782
- (27) ThWNT,Bd.1,787; RAC Art. Frau,Bd.8,226; Encyclopedia Judaica,vol.15,627; Leipoldt, a.a.O.,72ff; Witherington,Women in the Ministry of Jesus,1984,101
- (28) Schweizer,123f; Leipoldt,a.a.O.125; Laland,E.,Die Martha-Maria-Perikope Lk10,38-42. Ihre kerygmatische Aktualität für Leben der Urkirche,Studia Theologica 13,1959,(70-85),81
- (29) Theißen,G.,Wanderradikalismus-Literatursoziologische Aspekte der Überlieferung von Worten Jesu im Urchristentum,ZThK 70,1973,245-271; Soziologie der Jesusbewegung,1978『イエス運動の社会学 キリスト教成立史によせて』ヨルダン社
- (30) ディダケーの成立年代は1世紀末から2世紀初頭であり、イエスの活動の時代とルカ福音書の成立期までの伝承の期間と多少すれるので、巡回霊能者についての扱いには注意を要する。
- (31) 注1参照。Theißenは(e)の読みを採っているが、我々の立場では(d)を採る。
- (32) Grundmann,a.a.O.,227; Schneider,Das Evangelium nach Lukas.1977,253; Klein,H., Barmherzigkeit gegenüber den Elenden und Geachteten. Studien zur Botschaft des lukanischen Sondergutes,1987,115
- (33) Theißen『イエス運動の社会学』邦訳p.47; ディダケー-11,1-4.7-10;12,1
- (34) さらに旧約からあるもてなしのモチーフにも留意。創18,1-8など。
- (35) Maddox,R.,The purpose of Luke-Acts,1982,12-15; Esler,P.F.,Community and Gospel in Luke-Acts,1987,24-26; Stegemann,W.,Zwischen Synagoge und Obrigkeit: zur historischen Situation der lukanischen Christen,1991

- (36) Fiorenza, *In Memory of Her*, 165, 邦訳 247; *A feminist Critical Interpretation for Liberation*, 32. 「言葉」が重視されていることはもちろんだが、「聞く」という姿勢もルカによれば積極的な意味を持っている。例えば Lk 8, 15 や Act 16, 14 の καρδία (心) の機能を考慮すべきである。καρδία の働きについては, Bovon, F., *Die Vermittlungen im theologischen Entwurf des Lukas*, in: *Lukas in neuer Sicht*, 1985, すでにが指摘している (89)。
- (37) Fiorenza, *A feminist Critical Interpretation for Liberation*, 33
- (38) Bovon, a.a.O., 75-97
- (39) Bl-D-R, 362
- (40) したがって, Fiorenza, *A feminist Critical Interpretation for Liberation*, 33 は, 決してこのテキストは女性を解放するものではない, と否定するが, 従来の注解者の説も一理あるだろう。また, この意味で, Schottroff の説も正しいと思われる。「イエスはここで, イエスに信じている女性たちを, 彼女たちを主婦や母としての役割に制限しようとするような強制に対して弁護しているのである」(「信じた女性たち」邦訳 99)。
- (41) Bovon, a.a.O., 75-97; Jeremias, a.a.O., 193; Busse, U., *Die Wunder des Propheten Jesus. Die Rezeption, Komposition und Interpretation der Wundertradition im Evangelium des Lukas*, 1979, 428-450; 470-485; Staudinger, F., "Verkündigen" im lukanischen Geschichtswerk, *Theologische-Praktische Quartalschrift* 120, 1972, 211-218
- (42) Conzelmann, H., *Die Mitte der Zeit Studien zur Theologie des Lukas*, 1954, S. 52 『時の中心—ルカ神学の研究』新教出版社 1965, 邦訳 106
- (43) 群衆やパリサイ派との問答のあと, 家に入って弟子たちに向かってさらに説明するというパターンがある (Mk 7, 17; 9, 33; 10, 10)。Klauck, H.J., *Hausgemeinde und Hauskirche im frühen Christentum*, 1981, 60-62
- (44) Conzelmann, a.a.O., 196, 邦訳 372
- (45) Klein, a.a.O., 111; Brutschek, a.a.O., 141
- (46) Klauck, a.a.O. 49
- (47) とくに使徒言行録に登場する女性を参照。マルコーヨハネの母マリア (Act 12, 12-17), ルディア (16, 13-15) など。
- (48) Sellin, G., *Komposition, Quellen und Funktion des lukanischen Reiseberichtes (Lk 9, 51-19, 28)*, *Novum Testamentum* 20, 1978, 100-135; 107
- (49) Flender, a.a.O., 15; Witherington, *The earliest Churches*, 129; 荒井「男も女も—ルカの女性観再考」『新約学研究』19, 1991, 2-17
- (50) Bovon, a.a.O., 81
- (51) *Θειβεν* 『イエス運動の社会学』邦訳 42-52; Klauck, a.a.O., 56-60; Fiorenza, *In Memory of Her*, 175-184 邦訳 263-275; Meeks, W.A., *The first urban christians*, 1983 『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社 1989, 邦訳 65f. 72ff.

- (52) Miyoshi,M.,Der Anfang des Reiseberichts Lk9,51—10,24,1974; 59—62,70—73
- (53) Ebd.76
- (54) Ebd.80
- (55) Ebd.72f.
- (56) Brutschek,a.a.O.,102—105

Die redaktionelle Konstruktion des Berichts "Martha und Maria(Lk10, 38–42)"

Ayako Hosoda

Der Bericht "Martha und Maria" im Lukasevangelium ist sowohl in textkritischer als auch feministisch–theologischer Hinsicht recht umstritten. Bisher wurde die Haltung Marias, die das Wort Jesu hört, positiv beurteilt. Marthas Haltung hingegen, die nur die häuslichen Arbeiten verrichtet, hat man eher negativ eingeschätzt. Wenn man diesen Bericht jedoch unter literar–kritischen, redaktionsgeschichtlichen und rezeptionstheoretischen Aspekten untersucht, wird Lukas eigentliche Absicht deutlich. Das durch das Dienen gekennzeichnete Verhalten von Martha steht nicht einfach Verhalten Marias negativ gegenüber, sondern Lukas mißt auch Martha eine positive Bedeutung bei.

Das Ergebnis der literar–kritischen Exegese ist, daß Lk10, 42b im Gegensatz zu 10,42a ein redaktioneller Zusatz ist. Lukas fügt die Passage hinzu, um die Leserschaft seine Idealvorstellung von christlichem Verhalten zu vermitteln. Beide Frauen, Martha und Maria, werden als Modell für christliches Handeln betrachtet. Aber nicht nur diese beiden Schwestern, sondern auch andere Figuren des Lukasevangeliums fungieren als Modell für richtiges oder falsches Verhalten.

Wenn man das ganze Evangelium als Erzählung liest, wird deutlich, daß der "Martha und Maria"- Bericht im Zusammenhang mit lukanischen Absicht zusehen ist. Er steht bezeichnenderweise am Anfang des Reiseberichts, der von Jesus als Wanderprediger erzählt. Dadurch ist die Szene, die im Haus von Martha und Maria spielt, von besonderer Wirksamkeit. Es wird nämlich schon gleich zu Beginn auf die besondere Beziehung zwischen demjenigen, der predigt, und den Empfängern dieser Predigt hingewiesen. Auf diese Weise lenkt Lukas die Aufmerksamkeit der Leserschaft auf Aspekte, die von der bisherigen bibelwissenschaftlichen Forschung noch nicht ausreichend berücksichtigt worden sind.